目　　次

はじめに …… 1

平和学習・長崎派遣事業行程 …… 2

青少年ピースフォーラム …… 3

参加者感想文(A班) …… 4
　鎌田　理那
　清水　百愛
　飯野　早瑛
　小山　真慧
　米田 ステファニー 咲笑

参加者感想文(B班) …… 14
　山下　桃花
　板東　桃子
　大野　薫子
　小森谷　はな
　岡田　里菜

参加者感想文(C班) …… 22
　渡邉　はるか
　清水　愛斗
　三觜　章斗
　松下　未侑
　力丸　恵莉聖

引率者感想 …… 32

記録写真集 …… 33

セレモニーメッセージ …… 39

はじめに

藤沢市は、１９８２年（昭和５７年）に「藤沢市核兵器廃絶平和都市宣言」、１９９５年（平成７年）に「藤沢市核兵器廃絶平和推進の基本に関する条例」を制定し、核兵器の廃絶、恒久平和の実現に向けて、公募市民で構成する「平和の輪をひろげる実行委員会」と協働で、さまざまな平和事業を進めております。

未来を担う児童・生徒を対象に実施する平和学習事業は、１９８７年（昭和６２年)、広島市に小中学生を派遣する「平和ツアー」として始まりました。２００２年（平成１４年）からは、訪問先を長崎市とした「平和学習・長崎派遣事業」となり、２０１１年（平成２３年）からは、「親子記者・広島派遣事業」を加え、被爆地を訪問し、被爆の実相や核兵器の恐ろしさ、平和の尊さを学ぶ機会として実施しています。

今年度は、新型コロナウイルス感染症の影響により休止していた被爆地派遣を３年ぶりに再開し、被爆遺構や原爆資料館の見学、公益財団法人長崎平和推進協会が提供する平和学習プログラム「青少年ピースフォーラム」に参加して、被爆体験講話をはじめ、全国の青少年と交流し、意見を交わしました。

派遣者のみなさんには、この平和学習事業で学び、被爆地長崎で感じた平和の大切さを、未来へつなぎ、広めていただきたいと思います。

今後も、この地球上からすべての核兵器をなくし、子どもたちの笑顔があふれる安心で平和な世界の実現に向け、市民の皆様とともに「平和の輪」をひろげる取組を行ってまいりたいと考えておりますので、よろしくお願いいたします。

藤沢市長　鈴　木　恒　夫

平和学習・長崎派遣事業行程

２０２２年（令和４年）８月７日（日）～１０日（水）

１日目
８月７日(日)

藤沢市役所＝🚌＝羽田空港＝✈＝長崎空港＝🚌＝城山小学校（平和案内人による解説）＝🚌＝稲佐山展望台＝🚌＝ホテル（泊）

爆心地にもっとも近い国民学校であった城山小学校（被爆校舎）を平和案内人の解説で見学しました。その後、稲佐山展望台へ向かい、原爆の被害が市街地に集中した理由を、山に囲まれた長崎市の地形から学びました。

２日目
８月８日(月)

午前

ホテル＝🚌＝原爆落下中心地公園（セレモニー）＝被爆跡見学（平和案内人による解説）＝原爆資料館

原爆落下中心地で事前に準備をした平和メッセージを皆で読み上げました。その後、平和案内人による被爆遺構や原爆資料館の見学をしました。

午後

平和公園＝青少年ピースフォーラム＝🚌＝ホテル（泊）

長崎市が主催する「青少年ピースフォーラム」（１日目）に参加し、被爆者の体験を聴講しました。

３日目
８月９日(火)

午前

ホテル＝🚌＝原爆落下中心地公園（鈴木恒夫藤沢市長と面談）＝被爆７７周年長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典参列

被爆７７周年長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典に参列し、被爆により亡くなられた方々に鎮魂の思いを捧げました。

午後

平和公園＝青少年ピースフォーラム＝🚌＝ホテル（泊）

長崎市が主催する「青少年ピースフォーラム」（２日目）に参加し、全国の自治体の青少年と意見交換などで交流を深めました。

４日目
８月10日(水)

ホテル＝🚌＝長崎空港＝✈＝羽田空港＝🚌＝藤沢市役所

青少年ピースフォーラム

1 プログラム

1日目 8月8日(月)

①開会行事

長崎市長挨拶、被爆体験講話

長崎市平和会館３階　ホール

被爆体験講話　講話者：山田（やまだ）　一美（かずみ）さん

国民学校６年生（12歳）の時、爆心地より2.3kmの路上で被爆。突如、真夏の太陽より更に明るい閃光に包まれ、ものすごい熱さに死を覚悟したが、幸い岩陰にいたため怪我もなく無事だった。自宅近くの溝に祖母・叔母と３人で身を潜めながら、破れた衣服で、怪我をして、幽鬼のように歩いて行くたくさんの被爆者を見ていた。原爆の無差別性、非人道性を知ってもらいたい。

②スライド資料や紙芝居を用いた学習・フィールドワーク

長崎市平和会館３階ホール及び

原爆資料館周辺・国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館

2日目 8月9日(火)

①被爆７７周年長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典への参列

【場　　所】平和公園内　平和祈念像前広場

【実施時間】午前 10 時 40 分～午前 11 時 45 分

②平和学習（意見交換）

【場　　所】出島メッセ長崎

2 参加者数等

①参加者数	②参加団体数	②青少年ピースボランティア
251人	29自治体	56人

A班

鎌田　理那
清水　百愛
飯野　早瑛
小山　真慧
米田 ステファニー 咲笑

引率者 益子　悦子
（藤沢市平和の輪をひろげる実行委員）

長崎平和学習に参加して感じたこと

大越小学校５年　　鎌田　理那

私がこの平和学習に参加したのは、今ロシアとウクライナが戦争をしていてなにも関係のない人たちも殺されてしまうという悲劇を見て同じ時代、同じ時間なのに自分たちとは大きく異なっていることを辛く感じたからです。

世界が平和になるためには、まず私たちの国のことを知ることから始めるのが必要だと思い今回の長崎平和学習に参加しました。

私の姉と兄もこれまで同じように長崎平和学習に参加しています。そして姉や兄からたくさんの長崎で経験したことを、教えてもらいました。その時がきたら私も参加したいと、ずっと思っていました。

今回藤沢市の長崎平和活動に参加させていただき長崎でおこった77年前の原爆の被害を直接見ることができました。

とくに印象に残ったのは、原爆資料館で見た黒こげになったお弁当やどろどろにくっついた６本のガラスビンなど身近にある物が原爆によって変わりはてた姿になることがとてもおそろしく感じました。

そしてこれは物だけではなく原爆の放射能を浴びた人たちも同じように悲惨な被害を受けたことを知り、とてもつらい思いになりました。

また、今回語り部さんたちから直接お話を聞く機会をあたえてもらいました。その人は、家族を何人も亡くし、とてもつらかったと教えてくれました。

もし私が同じ立場だったとしたら、立ち直れないのではないかと想像しました。その人たちの力強さに心から尊敬しました。きっと支えてくれる人たちがいたから立ち直れたのではないかと思います。

長崎には100年間、草木も生えないと言われていましたが、今回長崎を訪れ、素晴らしく素敵な街並みを見ることができました。

しかし長崎に住んでいる人たちは、心の底に深い悲しみを忘れていないことも知りました。戦争は、二度とおこしては、いけないと強く思いました。

今回長崎に行くことができて本当によかったです。

心に残った平和学習のこと

藤沢小学校６年　　清水　百愛

私は、この長崎派遣事業を受けて、とてもいい経験をしたなと思いました。とくに印象に残ったことは、２つあります。

１つは、旧城山国民学校のことです。入ってみると、壁にびっしりとある写真や図におどろきました。こんなにたくさんの写真が撮られていたんだ…。そう思って２階に行くと、やっと（？）写真以外のものが現れました。旧城山小学校の模型や、カラスザンショウの枯れ死状態、それに高い熱を受けて黒く炭化した木レンガの跡です。写真は悲惨のものばかりだったので、心が痛みました。

２つ目は、被爆77周年長崎犠牲者慰霊平和祈念式典、つまり式典のことです。式典で心に残ったのは、長崎平和宣言と、平和への誓いです。

長崎市長の言葉の中で『（核兵器を）持っていても使われることはないだろうというのは、幻想であり期待に過ぎません。「存在する限りは使われる」。核兵器をなくすことが、地球と人類の未来を守るための唯一の現実的な道だということを、今こそ私たちは認識しなければなりません。』というものがありました。私はとても同感しました。核兵器が、今も在るからこそ、戦争があるんだなと思いました。そして、宮田隆さんのお話では、『私は６月、ウィーンで開かれた核兵器禁止条約第１回締約会議に参加し、会場や路上で「HIBAKUSHA」と書いたゼッケンを着用して訴えました。

“Please visit Nagasaki. To see is to believe, No more Nagasaki, Stop Ukraine”』という話に胸を打たれました。とくに、『No more Nagasaki』という言葉は良い言葉だなと思いました。

そして３つ目は、青少年ピースフォーラムのことです。一番心に残ったのは、疑似体験で、戦争のおそろしさ（など）を教えてくれました。最後のほうでは、とてもショックでした。また、意見交換会で別の自治体の人、同じ自治体の人と仲良くなれて、さらに、みんなにとっての「けんか」がおこる理由などを知れて“けんか”に対しての視野が大きくなりました。

私は、この長崎派遣事業を受けて、戦争や核兵器に対する考えが変わりました。戦争や核兵器に対して、もともと私は、戦争がなくおだやかな日常が当たり前のようにおくれるのが、平和だと思っていました。しかし、今は、核兵器がこの世になく、１人、２人でも多くの人が自分にできる事をさがせる事だと思いました。これ

からは、自分にできる、平和の輪を広げるための行動を自らさがし、この体験で学んだことを、多くの人に伝えていこうと思いました。

今、思うこと

村岡中学校２年　　飯野　早瑛

私はこの「平和学習長崎派遣事業」に参加するまでは、原爆について知っていることは少なく、教科書などでなんとなく読んだことを覚えている位の知識量でした。

ですが、今年実際に被爆地である長崎県へ行き、被爆者の方々や現地の方々から原爆についての貴重なお話を聴くことができ、そこから多くのことを学ぶことができました。

私が長崎派遣中、聞いたなかで特に印象的だった言葉がありました。それは「核と人類は共存できない。」です。私もその通りだと思います。原爆は多くの人々の尊い命、明るい未来、あたりまえの日常を一瞬にして奪ってしまったからです。

そこから私は、日常のあたりまえがどれほど幸せなことで、めぐまれていることなのかを感じました。

原爆資料館が私にとって特に印象的でした。展示物を一つ一つ見ていくとなかには目をそむけたくなるようなモノや写真がありました。その時私は言葉ではあらわせないほどの原爆の威力や悲惨さに対する恐怖を感じたのを今でも覚えています。

現在、原爆投下から七十七年の月日がたっています。そして、当時の様子、自身の被爆体験、原爆のおそろしさ、悲惨さなどを語る人達が年々少なくなっているのが事実です。

二度とこのようなあやまちを繰り返さないためにも、これ以上原爆によって苦しむ人を増やさないためにも、より多くの人が原爆について学び、被爆者の方々の思いを受け継ぎ、一人でも多くの人に語り継いでいくこと、後世にこの事実を残すことが大切なのではないかとこの長崎派遣から考えました。

長崎に行って感じたこと

羽鳥中学校２年　　小山　真慧

僕は長崎派遣で沢山の事を学ぶ事ができました。その中から特に印象に残った物と、それを見た感想を書きたいと思います。

一つ目は、原爆資料館を見た事です。原爆資料館では、とても怖い思いをしました。なぜなら、人の怪我がどれだけ酷かったのかや原爆のせいで酷く壊れた時計を見たからです。それらを見て僕は、

「どこの国にも原爆は落としてはいけない。」と強く思いました。

二つ目は一本柱鳥居を見たことです。最初は僕達の周りにあるような鳥居が原爆のせいで半分になってしまったと聞いて、

「鳥居がとばされてしまうなら、人も簡単にとばされてしまったのではないか。」と思い、生き残った人は原爆の放射線や爆風などに耐えたと考えると、とてもすごいと思いました。

三つ目は平和祈念式典に参加した事です。被爆された方々の歌を聞いたり、長崎市長の平和宣言を聞いていた僕には、

「七十七年前にあった事でまだ苦しんでいる人が沢山いるから、もう二度と原爆を落とさないで。」と訴えているように聞こえました。二度とこのような核兵器は使ってはいけないと、とても強く思いました。

四つ目は、旧城山国民学校（現在の城山小学校）についての説明です。僕達を案内して下さった、野田隆喜さんの父・和良さんについてとても貴重な話を聞くことができました。例えば、亡くなられた家族の遺体を当時は、木を組み立ててその下から火を当てて遺体を焼いていて、正しい木の組み方をしないと、遺体は焼くことができないと言っていたと僕達に教えてくれました。僕はその事を聞いて、木の組み方を一ヶ所でも間違えたら遺体を焼くことができないと考えたら、木の組み方を覚えられる事が暗記の苦手な僕にとって、とても凄い事だと思いました。

今回自分が平和学習・長崎派遣事業に参加しようと思ったのは、毎年平和祈念式典をテレビで見ていたので、機会があれば参列し、平和な世界を望む気持ちを強くしようと思ったのと、実際に被爆された方の苦しみについてさらに深く考えたいと思ったからです。

実際に長崎に平和学習に行ってきて、平和祈念式典に参列できてとても光栄でした。毎年テレビで見ていた平和祈念像を間近で見る事ができ、平和に対する気持ち

が強くなりました。また、実際に被爆者の話を聞くことができて、僕は、「今生きている世界は僕達にとっては当たり前かもしれないが、被爆された方にとっては続いていて欲しい世界なのではないか」と思いました。そのような事を思いながら平和祈念式典に参列して、被爆された方々の歌や、長崎市長の平和宣言を聞いて「平和は何より大切だ。」と今回長崎に行って改めて感じ、平和学習・長崎派遣事業に参加できて、とても良い経験になったので、長崎派遣で学んだことを知り合い等に教えて、知り合い等にも平和に対する強い気持ちを持ってもらいたいと思いました。参加させて頂きありがとうございました。

私にできること

N 高等学校 3 年　　米田 ステファニー 咲笑

事前学習で平和とは何か問われたとき、A班では、「当たり前の生活がおくれて対等に話し合うことができる世界」と答えた。長崎から帰ってきて、私は今一度消極的平和と積極的平和も踏まえて平和について考えてみた。

消極的平和と積極的平和とは平和学の第一人者と言われているノルウェーのヨハン・ガルトゥング博士が唱えた定義である。消極的平和では単に戦争がない状態を平和と考え、積極的平和では貧困・抑圧・差別などの構造的暴力がない状態を平和と考えた。私は事前学習でこの概念を知ったとき、消極的平和と積極的平和は現実と理想みたいなものだと解釈した。

消極的平和はいずれ実現すると考える。現在、世界中が核兵器廃絶のために議論を重ね、核不拡散条約（NPT）や核兵器禁止条約などに署名する国が増えている。どちらの条約もまだ改善が必要だが、確実に核兵器廃絶には近づいている。今後核兵器が廃絶されると、核保有国と非核保有国の力の差が少なくなり、対等な議論が可能になる。そのため、戦争に至る前に問題を解決できる割合が増えると考えている。

現実味を帯びている消極的平和に比べ、積極的平和はより複雑である。差別などの歴史は紀元前まで遡り、解決する術は無いに等しい。また、積極的平和には教育が重要だと考えている。学校で世界について学び、他国の価値観やルーツを理解できるからである。しかし、現在学校に通えていない子供が世界に三億三百万人程いると言われており、その原因の殆どが貧困である。貧困を解決するには、社会問題を全て解決するほかなく、その方法は前述した通りほぼ無い。そのため、私は積極的平和が実現した世界のことをユートピアの様な理想郷だと考えている。

積極的平和は実現しない。そう断言した上で、私がどの様な行動をとれば積極的平和に近づけるか考えている内に、原爆資料館での光景を思い出した。原爆資料館を周っていると、息子と娘を連れた母を見かけた。母は子どもたちに原爆の怖さや戦争の非情さについて説明していたため、あまりに刺激的なのではないかと始めは考えていた。しかし、この母が行っている「伝える」という行為こそが平和に繋がるのではないかと気づいた。

長崎では幾度となく「伝える」という行為を見たが、それらは当たり前ではない。平和学習に参加する機会を与えられること自体、大変運が良いと考えている。世界

では、学校にすら通えず、生活するのに必死な子供が数多く存在する。そのような情勢の中、言論の自由があり、教育を受けられるのは奇跡だ。そのため、私は青少年ピースフォーラムの様な意見交換の場や世界について学べる機会を未来の子どもたちに設けたいと考えている。将来私が設けた場から同じ考えの子供が輩出され、平和の連鎖となれば、積極的平和に限りなく近付くことができるだろう。

原爆犠牲
安寧に眠れ原爆犠牲者

B班

山下　桃花
板東　桃子
大野　薫子
小森谷　はな
岡田　里菜

引率者　岡本　直樹
（藤沢市平和の輪をひろげる実行委員）

平和への願い

滝の沢小学校５年　　山下　桃花

この夏、人間は愚かな生き物ということを知った。４分の３世紀がたった今もどうして私たち人間は、核兵器を未だになくすことができないでいるのでしょうか。人の命を無残に奪い、人間らしく死ぬことも許さず、放射能でゆっくりゆっくりと息の根を止める。それだけじゃない、大切な家族や隣にいたはずの友達、いつもとかわらない愛しい日々が77年前の広島、長崎で奪われたのである。

今回の平和学習事業で、今では考えられないようなことが起きていたと分かり、私たちの「当たり前」が「当たり前」でなかった時代もあったのだと改めて感じました。

“みんなが楽しく笑顔でいられる日々”

私はそれが平和だと思います。そして、毎日が平和になるためにすべきことは主に３つあると思っています。

１つ目は、戦争をなくすことです。戦争がなくなれば無意味な殺し合いや、広島、長崎の人々を苦しめた核兵器の投下などもなくなるからです。

２つ目は核兵器を廃絶することです。核兵器が無くなれば、「核の抑止力」になることもなく、広島、長崎であった悲惨なこともくりかえさずに済むからです。

３つ目は核兵器の恐ろしさや戦争の悲惨さを、後世に伝えていくということです。正直、１つ目と２つ目を今の私たちが実現することは、難しいことかもしれません。それでも、語り継ぐことはできます。人々が原爆の悲惨さ、恐ろしさを忘れ去ることがないように、私たちが後世に伝えていくことが大切だと思いました。

私は、今回の平和学習で平和とは何か、核兵器をなくすためにはどうしたら良いか、とても考えました。平和とは、みんなが幸せで安全、安心、笑顔で日々を過ごせること。核兵器をなくすことは、いろんな人に核兵器について知ってもらうことだと思いました。

平和を願った、たくさんの人々の犠牲の上に立ってこそ、今があるということを感じながら大切に過ごしていきたいと思います。

長崎に行って学んだこと

本町小学校６年　　板東　桃子

広島、長崎は原爆というたった一発の爆弾によって多くの死傷者、そして大切な家族や友達、幸せさえもうばわれてしまったという悲惨な事実。私はその悲しさと恐ろしさを、長崎で痛感しました。

長崎に行って私は特に２日目が心に残りました。そして、なにより如己堂が心に残りました。如己堂とは「長崎の鐘」や「この子を残して」などの本を書いた永井隆博士が当時住んでいた、たたみ２畳ほどの小さな家です。永井博士が如己堂に住んでいたのは被爆後で前は大学医院で放射線医師をしていたそうです。しかし、1945年８月９日に永井博士は被爆し、大けがを負いました。けれども生き残った医師やかんごしとともに、わが身をかえりみず負傷者に救護活動を行ったという事実に私は心をうたれました。もしそんな状況に私がなってしまったら人のことよりも自分のことを一番に考えてしまうと思うからです。けれど、永井博士は家族の消息もたずねないまま救護活動を行いました。私はこのような他者への思いやりの行動が、平和な世界の第一歩だとこの如己堂に行って感じました。また、如己堂とは「己の如く隣人を愛せよ」という意味で、私はこの言葉を聞いたときにこの言葉こそが永井博士の信念であるんだろうと思いました。

私はこの平和学習に参加して、ふだんは考えたこともなかった「平和とはなにか」についてたくさん考えました。私が考える平和とは世界中の人が自分の好きな事が自由にできて、みんなずっと笑っていられるような幸せな世界です。だから、私が考える幸せにするためには私の身の回りの人たちから笑顔にしていこうと思います。そしてこの学習に参加してもう１つ学んだことがあります。それは今ここにある「当たり前」が当たり前じゃないということです。友達と何気ない会話をしたり、ゲームをしたり、自分の時間を楽しんだり、当時は当たり前などではなく遠い幸せの夢だったのです。私はこれからは、今ある当たり前の日常を当たり前と思うのではなく、平和を願ったたくさんの人々の犠牲の上に成り立っている、ということを感じながら過ごしていきたいと思います。楽しくも勉強になった充実した３泊４日でした。

笑顔と誇り

慶應義塾湘南藤沢中等部２年　　大野　薫子

私がこの平和学習に参加しようと思ったきっかけは、永井隆の『この子を残して』という本を読んだからです。一瞬で沢山のものを壊してしまった原爆の残酷さや、その中で立ち上がり自分の身を犠牲にしてでも多くの患者を治療した永井博士の強さを知りました。今まで他人事のように思っていた戦争、原爆について考えることが増えこの平和学習に参加し実際に被害を受けた物を見たり、話を聞いたりすることで、戦争や原爆に対しての理解を深められると考えました。

永井博士は1908年に生まれ放射線医師になり、放射線の研究をしていく中で多量の放射線をあびて白血病になってしまいました。患っていた白血病に重ね、原爆で大けがを負ってしまった博士は被爆から６年後、43才の若さで亡くなりました。永井博士は被爆直後、自身が通っていた大学は壊れ、学生達も亡くなり、戦争が終わったら世に出そうと今まで研究してきたものが全て灰になって絶望している時に、放射線という自分の得意なジャンルの新しい病気だった原爆症の観察者になれた。これを研究しようと自分を奮い立たせたり、寝たきりになって医師として動けなくなった時に、頭や目、手は使えると本を書いて戦争のおろかさや、平和の大切さを訴えたりしました。絶望を乗りこえて前へ進んでいく永井博士は、被爆して何もかも失った人達に希望を与えていたと思うし、後世へ残すために多くのことを記した永井博士のことは本の内容と共に私達が伝えていかなければいけないと思いました。

『平和の大切さを訴える』これをするのはどんなに大変なことなのでしょうか。永井博士のように本に記したり、ピースフォーラムでお話してくださった方のように多くの人の前で語ったり。方法はたくさんあれど、悲惨な記憶だったからと思い出したくもないと言われる方もいる中で行動に移すのはとても勇気がいることだと思います。世界中では核兵器以外にも様々な問題があったり、時間がたって戦争や原爆の記憶が薄れていたりしてあまり関心を持たれていない現状にあると思います。そんな中で今回学んだ知識だったり、貴重なお話だったりを使いながら、戦争や平和について考えられる機会を作れたらと思います。

私は平和とは誰もが思いやりの心を持って笑顔でいられることだと思います。一人ひとりが自分に誇りを持って行動してほしいです。このような話をたくさんの人としたいし、これからも考え続けます。

平和な世界を目指して

長後中学校３年　　小森谷　はな

私が長崎平和学習に参加した理由は、今、ウクライナとロシアとの間で戦争が起こっているからです。私はそのことを知ったときは、「まさか本当に戦争が起こるなんて…」と信じられませんでした。ですが、ニュースの映像を見ているうちに、「本当に戦争が起こっているんだ。」と実感するようになりました。そして、「日本でも戦争が起こるかもしれない。」という恐怖と、「どうすれば平和な世界が作れるのだろう。」という想いが生まれました。そして、この想いを胸に、長崎へ行きました。

長崎では、城山小学校や浦上天主堂を見学したり、原爆落下中心地を訪れたりとたくさんのことをして、学びました。その中でも特に印象に残っているのは、青少年ピースフォーラムでの意見交換です。「ケンカや戦争はなぜ起きるのか」。それが１つ目のテーマでした。私達の班はその中でも「ケンカ」について考えました。一見簡単そうに見えましたが、いざ考えると全然思い付きませんでした。ケンカをするということは相手を傷つけるということ。なぜ相手を傷つけてしまうのか、という考え方をして、思いやりや相手への理解が足りないからではないか、と意見を言いました。他の人達の意見で、ストレスがたまっているから、というものがあり、私も「心の余裕がないと確かに人にきつく当たってしまうかも」と共感しました。

２つ目のテーマは「ケンカや戦争をなくすにはどうすればいいか」という、まさに私が平和学習に参加するきっかけにもなった想いがテーマでした！私達の班は１つ目のテーマに引き続き、ケンカについて考えました。これは思っていたより簡単で、私はいつも家で父に言われている、何か言う前に深呼吸という意見を出しました。他にも、自分の意見を柔かい言葉で説明するや文章で伝える、という意見を出しました。他の人の意見で「第三者の意見を聞く」というものがあり、考えてもみなかった解決策でとても驚きました。

最後のテーマは、「戦争をなくすために自分ができることは」というものでした。私はすぐにこう書きました。「自分の周りを笑顔にする」と。

きっと今までの私ならとても悩んだテーマだったと思いますが、この平和学習、ピースフォーラムを通して私は自分なりに答えを見つけることができたのだと思います。ピースフォーラムでは全国の人と意見を交換し、自分の視野を広げることができました。そして、私は、「戦争は決して起こってはいけないものだ」という考

えを強くしました。

少しでも平和な世界にするために、私は「自分の周りを笑顔にする」ということを実践していきます。

平和学習・長崎派遣を終えて

慶應義塾湘南藤沢高等部３年　　岡田　里菜

「戦争だけはもう起こしてはいけない。」

これは、青少年ピースフォーラムの被爆体験講話での被爆者・山田一美さんの言葉である。今回の長崎派遣平和学習では、被爆体験講話を含め、この言葉の重みを実感することができるような貴重な経験を数多くすることができた。

その中でも特に私の心に残ったのが、同じく青少年ピースフォーラムで行われた戦争疑似体験アクティビティである。このアクティビティは、戦時中の日本という設定のもとで与えられたシチュエーションごとに、自分の大切な物・人・場所を書いたカードを手放していくというものだった。

軍に召集された「父」。空襲警報の音が鳴る度に消えていった大切な物や人たち。そして、原爆投下後に唯一残った「自分」。一つ、また一つと手札のカードが減っていくのを見て、私は戦争によって何気ない日常が壊されていく苦悩をひしひしと感じた。

戦後生まれの私たちは、当然ながら戦争を経験したことはない。しかし、戦争が人々にもたらした苦しみを知り、今後そのような苦しみを経験する人をつくらないために努力することはできる。ゆえに、私は長崎で得た知識と経験をもとに、今後は戦争と核兵器の非人道性を多くの人に発信していきたいと思う。

C班

渡邉　はるか
清水　愛斗
三觜　章斗
松下　未侑
力丸　恵莉聖

引率者　田代　和也
（藤沢市人権男女共同平和国際課職員）

77 年前のあの日…

六会小学校５年　　渡邉　はるか

「ピカ、ドーン」と鳴りひびく爆発音といっしょにとんでくる爆風、熱線、放射線。炎と暗やみにつつまれた空かんには、多くの人がたおれ、子供をだき、水をくれと助けをもとめていた。そう。あの77年前の昭和20年、８月９日、11時02分。長崎の明るく、緑ゆたかな町にときはなたれた一つの大きな原子爆弾だった。

私はこの長崎の原爆、戦争、平和について現地へ行き、その学んだ事を少しでも多くの人につたえ、うけついでいきたいと思い、この活動に参加した。そして、一つの真実を追いもとめたかった。

私はバスの中でバスガイドさんが「ちらっ」と言った「しっぽも一役」という言葉が心にのこっています。この言葉は永井隆博士がふとんにねころがりながら孫へブタを書いたそうです。ですが、永井博士は絵がうまいのにブタには見えなかったそうです。そこで孫が「しっぽがないよ。」といい、しっぽを書きたしました。すると、くっきりブタになったといいます。永井博士は「しっぽも一役」というフレーズを書きたしました。私はこの話を聞いて、たとえ小さな物でもむだな物はない、どんな物でもある意味があるという事を学びました。ゾウでも鼻が短いと分からないし、キリンも首が長い意味があるように、ブタのしっぽも立派な一役という意味なのです。この言葉も後世へ伝えていき生活へやくだてていきたいです。

２日目の案内人さんのお話も心にのこりました。一本柱鳥居のお話で、「表面に書かれた名前は熱風によって消され、とけてしまったくらい熱かった」と聞いて、とてもおどろきました。うら面はかろうじて名前がのこっており、こんな中とうじの人たちがいたのだと思うと、少しその場にいた人の気持ちが分かった気がしました。被爆クスノキは、「70年は草木も生えない」といわれていたのに、２カ月後に芽を出したといい、クスノキも生きるために一生けん命だったんだなーと思い、これからもより多くの人に原爆の体験をかたっていってほしいと思いました。私はこれらのけい験をふまえて、真実は一つじゃないと思いました。一人一人の11時２分の物語があり、みんなの思いがあると思いました。ですが、一つ不しぎな事があります。核兵器禁止条約にしょめいしないのかという事です。日本はゆいいつ原爆が落とされた所なのに、思い入れがあるはずなのにとても不しぎです。しかも、岸田総理大臣は広島県出身で小さいころから原爆についてふれてきたはずなのになぜしょめいしないのかそうぞうできません。いっこくも早く核兵器禁止条約にしょめ

いし、世界の平和を広めていってほしいです。

　私はこれから、多くの人に今この場にある平和をつたえ、世界を平和にするために活動したいです。

ぼくたちにできること

藤沢小学校６年　　清水　愛斗

ぼくは今回、とても貴重な体験をさせていただきました。平和についての思いはますます高まりました。ここでは、特にぼくの心が動いた体験を二つ紹介します。

一つ目は、長崎派遣二日目の班別見学の時に行った一本柱鳥居と山王神社（被爆クスノキ）です。一本柱鳥居は、原爆直後にもともとあった鳥居の半分が爆風と熱線によってたおれ、もう片方が残ったものです。しかし、残った鳥居の表側にあった山王神社をつくるためにお金を寄付してくれた人たちの名前が熱線によってとけてしまったそうです。では、なぜ半分の鳥居は残ったのか。平和案内人の人に聞いてみると、「爆風のびみょうなバランスで残った」と答えてくれました。ぼくは「奇跡だ！」と思いました。なぜなら、原爆のいりょくはとてもすごいからです。長崎に落ちたものの方が広島に落ちたものよりもいりょくが強く、長崎は山に囲まれた地形だったため被害は大きくなかったですが、それでも犠牲者は七万人。もし長崎が平野だったら…考えただけでゾッとします。きっと、広島よりも被害が大きかったと思います。建物もたおれてしまうほど原爆のいりょくは強いので、ふつうの家なら一瞬でたおれてしまいます。それでも風のびみょうなバランスで残ったことはとてもすごいことです。奇跡です。何度考えても奇跡です。

一つ目から長くなってしまいましたが、二つ目にいきます。二つ目は平和式典で聞いた平和への誓いです。これは被爆者の宮田隆さんが言ったことです。その話の中で一番心が動いたのは、宮田さんの体験談に出てくる看護婦さんの話です。その看護婦さんは「水をください」といいながら絶命していったようです。ここから考えるに、体内の水がない可能性が高いです。体内中の半分以上は水分のため、とても体への被害が大きいです。では、なぜ体の内の水分がなくなってしまったのか。先ほどでてきた平和案内人の方によると、原爆の内訳の一部である熱線で水分が蒸発してしまうからだそうです。それまで考えていた原爆とはちがう、もっと怖いイメージがうかび上がってきました。

ここで紹介した他にも、たくさんの貴重な体験をたくさんさせてもらいました。ぼくは帰ってきてから、「この世界中の人たち一人ひとりに世界を平和にできることがある」と思いました。被爆者の人は次の世代にそのことを伝え、その伝えられた世代はまた次の世代に伝えたり、原爆について調べたり…できることはたくさんあります。これからも、自分にできることを探し、行動に移し、世界を平和に一歩

でも近づけていきたいです。

平和への一歩

第一中学校２年　　三觜　章斗

私は今回の平和学習・長崎派遣にてたくさんのことを学びました。城山小学校がなぜ残ったのかや一本柱鳥居はなぜ片方だけ残ったかなどを学びました。

長崎派遣では平和についての勉強以外にも他県の中高生とのコミュニケーションや話し合いなどをしました。中でも私は特に、「青少年ピースフォーラム」という活動に参加し、戦争、そして争いはなぜ起きるのかなどを話し合いました。私は初対面の人と話すのは苦手でした。ピースフォーラムを通して、嫌な時間ではなく、とても楽しさあふれる一時でした。その他にも被爆者の方々のお話、そしてガイドさん達の熱心な心に対し、私は胸をうたれました。こんなにも、この原爆のことに対して、熱心に私達若い世代の人にこの思いを伝えたいという熱い心に感動しました。

今回の長崎はとても良い体験になりました。しかし、これで終わりではありません。なぜ私達が長崎に行ったのかということを忘れてはいけません。人それぞれ考えていることは違うと思いますが、私はこのことを多くのまだ知らない人達に向けて発信し、全員がこの世の平和を願い、争いのない世界へ変えることを望んでいます。今、私は中学二年生で学級委員をしています。学年が上がってもこれは続けるでしょう。今回学んだこの悲惨さ、そして悲しみをまずは学校の全員がこのことについて考えられる時間を作りたいと思いました。平和を実現するためにも、自分の最大限を尽くし、これからもこの活動を継続できるようにしたいと思いました。

私たちの使命と平和への願い

湘南白百合学園中学校２年　　松下　未侑

皆さんは原子爆弾の爆発音、空襲警報の音を聞いた事がありますか？体が身震いし、思わず耳を塞ぎたくなるような恐怖の音です。

私は実際にこの音を聞き、空襲時に身を守る構えを教えて頂き、体験しました。

この夏、私は「平和の尊さ」を再確認するために長崎を訪れました。悲惨な過去があった場所「長崎」は、今は開国で栄えた美しい建造物が建ち並び、路面電車も走り、緑豊かな活気のある美しい街でした。

しかし、77年前。たった一つの原子爆弾によって火の海となり、全てが失われてしまいました。建物が爆風によって一瞬にして崩れ、人々が建物の下敷きになり苦しみながら亡くなっていきました。皮膚が焼けただれた痛々しい体で必死に水を求める人々…。あちこちに転がっているまっ黒になった死体…。

原爆に終わりはありませんでした。投下した瞬間だけでなく核から発せられた放射能を浴びてしまった人たちは、時間が経ってからも皮膚が溶けたり、白血病やがんなどの後遺症に今でも苦しみ続けています。

原爆は、かけがえのない命、家族、友人、そして未来までも奪ってしまいました。

しかし、人々は一筋の希望の光を頼りに立ち上がりました。熱線で焼かれ、枯木同然となってしまった山王神社の「クスノキ」のように…。「70年は草木も生えない」と言われたクスノキは、原爆投下から約２ ヶ月後に芽を出し、人々に勇気と希望を与えました。

未だに世界には12,000以上の核兵器が存在しています。ロシアによるウクライナ侵攻により、現在も悲しみの戦争が繰り返され、三度目の核兵器使用の危機に直面しています。

戦争をして何を得られますか？人々が幸せになりますか？戦争は、ゲームやフィクションではありません。殺傷能力のある武器や爆弾を使い、生身の人間同士が傷つけ合い、殺し合い一瞬にしてかけがえのない家族や日常など大切なものを奪ってしまいます。

世界で唯一の被爆国、日本。その脅威と惨禍を世界中へ伝えられるのは私たちしかいません。当時、私たちと同じ年頃の少年・少女たちもたくさん命を落としました。彼ら彼女らが歩むはずだった幸せな未来で私たちは生きています。だからこそ私たちは、この悲惨な出来事を忘れることなく世界へどんどん伝えていかなければ

ならないと思います。

平和祈念式典で長崎市長さんがおっしゃられた「長崎を最後の被爆地に」という言葉。被爆者の方々の切実な想いを単なる願いで終わらせてはいけません。

世界から核兵器をなくし、戦争によって誰も傷つくことのない平和な世の中が一日でも早く訪れますように…。

平和とは？

横浜隼人高等学校３年　　力丸　恵莉聖

平和とは何か？こう聞かれたらあなたは何と答えるだろうか。戦争や争いがないこと？核兵器などの武器が存在しないこと？これらの答えももちろんあるだろう。私はこの学習において初めてこの問いをされた時に「みんなが笑顔で幸せに暮らせること」と答えた。今回は私が学習中に学んだことを踏まえてこの答えのない問題に自分なりに答えを出していこうと思う。

学習全体を通して一番心に残っているのは、ピースフォーラムである。ここでは戦争が起きる原因とその解決策について話し合った。その中で戦争が差別や貧困など、他の問題を解決するための手段として使われているという意見が出た。私はここで事前学習で話があった、積極的平和と消極的平和のことを思い出した。文章の初めに挙げたような争いがない状態というのは消極的平和であり、その他の差別や貧困、いじめなどがないことまで広い意味での「平和」が積極的平和にあたるということだった。

私は社会問題の解決に少しでも力になりたいと思い、今回の学習もその一つとして参加した。この積極的平和の説明を聞いて、今までそれぞれ別々の解決策を考えようとしていたが実際は全て一つの問題として考えることができると分かった。そしてこの考え方によって今日本にも存在しているいじめや差別、貧困等の問題。そして世界にある核兵器や戦争が起きているという事実。これらの社会問題を広く解決することこそが必要なことだと感じた。

もう一つ記憶に残っている、疑似戦争体験について紹介する。カードに１つずつ自分の大切な人や物、場所を書き、空襲警報が鳴るたびにそこでなくなってしまう人や物、場所のカードが回収される。空襲警報は何回かあったが、私は途中で全てのカードを出し終わってしまった。そこはかとない悲しみと恐怖に襲われた。今回は実際になくなったわけではないが、実際になくした方の悲しみは一体どれほどだったのだろう。事前学習の資料で原爆で家族を亡くされた方の手記を一部だけ読んだが、やはり自分で体感してみるのとでは全く違う。

私はこのプログラムの最後のマイ平和宣言に「毎日笑顔でできることから少しずつ実践していく」と書いた。これに加えて、私が今思うことは「思いやりを持って相手に接すること」だ。私は長崎の学習の間「唯一の被爆国である日本国民として何をしていくべきか。どのように平和を伝えていくべきか。」と考えた。日本人が

得意とし、世界に誇れるものの一つである「思いやり」をもっと世界に広げていけば、戦争をなくしていくことができるのではないか。これを美点とするのも欠点とするのも私たち日本人の行動次第である。

　最後に自分自身の決意も含めて、もう一度新たなマイ平和宣言でこの文章を締めたいと思う。「毎日笑顔で思いやりを持って、少しずつ行動する」

引率者感想

Ａ班引率：益子　悦子

コロナ禍の中でも、今年は３年ぶりに広島、長崎派遣を実施することができ、とても良かったと思います。私は４回目の参加でしたが、９月に長崎新幹線が開通するのに伴い、長崎駅周辺の開発など、新しい長崎に触れることができました。また、初めての体験として、城山小学校でテレビ局の取材があったこと、式典での警備が厳重で、引率者は中に入れなかったことなどがありました。

今年は派遣者が１５人と少なかったのですが、来年以降、もっと多くの人たちを派遣することができるよう、願っています。

Ｂ班引率：岡本　直樹

私は小学５年生の時に派遣者の一人として参加し、今回は引率として参加させていただきました。１１年ぶりに訪れた長崎では当時の記憶が何度も蘇り、平和のために自分にできることは何かと改めて考えさせられました。まずは、長崎へ行って見聞きしたことや感じたことを一人でも多くの人に伝えることが、誰かに届く平和へのアクションになるはずです。長崎派遣に参加して終わりではなく、この経験を活かして、これからも積極的にチャレンジしてほしいと思います。

Ｃ班引率：田代　和也

被爆者による体験講話や被爆遺構の見学、青少年ピースフォーラムへの参加など、数多くの体験をとおして被爆地長崎で学び・考えたことは、とても貴重な経験となったことと思います。

今後、平和学習事業での現地学習をとおして考え感じたことや、被爆者の想い・願いを一人でも多くの方に伝えていただくことを願っています。

最後に、新型コロナウイルス感染症による影響が懸念される中、本事業に対してご協力いただきました皆様に厚く御礼申し上げます。

記 録 写 真 集

派遣期間　8月7日～10日

長崎市歴史民

My平和宣言
発表
ボード創りつけ
(15分)

②自分の住む地域で
取り組んでいる平和
(15分)

5
16
12

Holland.

B

メッセージ文

今、世界には戦争をしている国があります。
さらに、核兵器の脅威は増え続けています。

原爆が落とされてから７７年がたちました。
今、被爆の体験を語る人が少なくなってきています。

その被爆者たちの思いを捨てずに、多くの人に伝え、後世に引きつぐことが戦争と核兵器を無くすために、大切なのではないでしょうか。

戦争は、国の指導者が独断で始めてしまうものだと思います。
一人ひとりが思いやりの心をもち、相手の気持ちを尊重することで、誰もが笑顔でいられるような平和な世界を作ることができます。

語り継がれた悲惨な戦争の記憶を忘れずに、自分たちにできることを考えて実際に行動に移し、小さな芽をたくさん伸ばして、みんなで大きな平和の木を作っていきましょう。

２０２２年（令和４年）８月８日
平和学習・長崎派遣事業参加者一同

藤沢市核兵器廃絶平和都市宣言

わが国は世界で唯一の核被爆国であり、核兵器廃絶と恒久平和の実現は全国民共通の願いである。
しかし、すでに地球上には多くの核兵器が貯えられ、人類の生存に深刻な脅威を与えている。
藤沢市は、日本国憲法の精神に基づく国の平和と安全こそが、地方自治の根本的条件であることにかんがみ、非核三原則が完全に実施されることを願い、核兵器の廃絶と軍縮を全世界に訴え、この人類共通の大義に向かつて不断の努力を続ける核兵器廃絶の平和都市であることを宣言する。

昭和 57 年 6 月 22 日